

## ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)  
群馬県前橋市元総社町七三ー五  
TEL 027・2555・3434  
FAX 027・2555・3435  
http://www.neues-asahi.jp

梨や桃の季節になりました。気候は少々変わってもまだ変わらない季節の楽しみもあります。食べるもので季節を感じる事ができるようになったのは何歳くらいからでしょう。おそらく幼少のころから繰り返された四季の記憶が体にしみ込んで、いつのまにか「この味を食べたらこの季節かな」となるのだから不思議です。製造の工夫や冷蔵技術の発達で、四季に関係なく食べ物が手に入る時代ですが、やはり季節に合った食べ物は、体や心にとっても良い気がします。

そんな偉そうなことを言っても、実は一人暮らしをするまで食べ物に「季節がある」ということはまったく感することなく過ごしていました。学生時代を過ごした街で、ある夏、スーパーが突然たくさん種類のトマト一色になったときに初めて「あ、トマトも季節があるのか」と思いました。そう思うと二十年くらいは出されたものをポーツと食べて生きていたわけです。そこから自分で料理もするようになり、安くて美味しい季節のものを重宝して調理したり、一度に沢山手に入れたものは長期保存できるように加工したりするようにもなりました。そんな生活を繰り返して、やっと季節の味を感じるようになったわけです。

食べ物ではありませんが、小さいころからの何気ない景色がふと思い出されて、とても懐かしく感じることもあります。先日、ノイエスで作家さんたちと話しをしていて、子どもの頃によく目にしてきた彫刻作品がその方のものだったので、その景色と一緒に様々なことを思い出しました。約三十年位前にその彫刻を目にした時以来の記憶です。でも作品にはそういった力があるのだと改めて感じました。

artの形容詞は「人工的な」という意味になり、それと反する言葉がnaturalとなっています。「自然」に反しての技術的な「人工的」という意味でartが使われるわけです。確かにビエンナーレなどで見る大自然に突如現れるアートは、とても違和感があるような、でも何故か共存してお互いの存在感を増しているような不思議な魅力をもっています。

初めて訪れた町の記憶も、そこに建つ建物や彫刻といったものと一緒に記憶されることがほとんどだと思います。家の中でいったら絵画でしょうか。毎日見慣れていると見慣れた一部になっていきますが、別の絵に変えてみるととっても新鮮です。そして、しばらく時間が経ってから前の絵がかかっていた時の写真やその作品そのものを見ると、なんとも懐かしい記憶がよみがえってきます。

ひと時の出来事にしても、繰り返された習慣にしても、人が「懐かしく」思うにはその記憶を「熟成」させる期間が必要なのかと感じています。年を重ねるごとに熟成された記憶や経験は増えるわけですから、なるべく良い経験を増やして、今後もしいつの日かふと思い出される記憶や季節の移ろいを楽しめるようにしたいと思います。

(橋本)

## ノイエス朝日〈展覧会〉のご案内

※入口で体温と体調とご連絡先を記入していただいています。  
マスク着用と手指の消毒も引き続きお願いいたします。

## 田島弘章・智子 二人展

〈企画〉

会期 十月九日(土)～十七日(日)

午前十時～午後五時(最終日は午後四時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2



## 住谷夢幻展

〈企画〉

| 墨のメタファー |

会期 十月二十三日(土)～三十一日(日)

午前十時～午後五時

会場 ノイエス朝日 スペース1・2



思いつくままに

スポーツの秋、芸術の秋、読書の秋といわれます。

東京オリンピック、パラリンピックが終わりスポーツの大イベントは一息ついた感があります。

芸術の秋は、東京では魅力的な展覧会が数々実施され、コロナ感染拡大がなければ足を棒にしても歩き回っていると思います。今はそれが叶いません。

中国の唐中期の文人の韓愈が「灯火親しむべし」と言われたように秋の夜長は読書に最適な季節です。

そんな思いもあり近くの書店をぶらぶらしていると懐かしい名前を書棚に見つけました。

書名は「編集者 漱石」著者は長谷川郁夫。

六百数十点の書籍を出した小沢書店社長、大阪芸術大学教授、日本編集者学会を発足し会長に……。

『文藝春秋』のアンケートに執筆してもらいたい人は……というハガキが挟まっていたので「長谷川郁夫」という名前が浮かび、久しぶりにどうしているかな?とネット検索をしてみると昨年五月に亡くなっていました。

カラオケでの小林旭の歌声、玄人はだしの落語。作家を囲んでの酒席で熱演している姿が浮かびました。

そして、心が痛みました。

高崎駅まで車で送っていったのが最後になりました。

編集者、評論家として多くの書籍を出版し、自著を出し、関わった多くの人に人間「長谷川郁夫」の魅力を残していただくことができました。

秋の夜長に書棚にある数冊の本のページを開いてみたいと思います。

スマホやパソコンを操作する指の感触ではなく、本のページをめくっていく紙に触れる感じと、本を閉じた時の匂いは、長い夜を過ごす時間をさらに静かにゆつくりと満たしてくれることでしょうか。

(M)

